令和４年度　後期始業式「式辞」「～流れに負けないように！～」

校長　下雅意　一之

みなさん、おはようございます。昨年度この場で私の大好きな乗り物のことで「飛行機と滑走路のお話」を通して、みんなにとって、この学校で過ごす三年間の今が、長い人生の滑走路にあてはまると、まっすぐ成長してほしい思いを伝えました。さて、今年の後期始業式では、昨年度同様、私の体験を通して学んだことを題材に、ひとつお話をしたいと思います。

それはカヌーの川下り体験初日に学んだことです。２０代の頃、よくカヌー（ファルトボート＝組み立て式カヌー）をしました。先輩の誘いと作家の野田知祐や椎名誠への憧れもあってカヌーを始めました。当時、流行のオフロード四輪駆動車（三菱パジェロ）で、カヌーを荷台に積んでは、川を求めて出かけました。１９９０年、京都府笠置町の木津川というところでの講習会に参加し、初めて川下りを経験し、以後、木津川をホームに、四万十川(高知県)、古座川(和歌山県)、由良川（京都府）などいくつかの川を下りました。私は１０～２０ｋｍほどを下るツーリングカヌーが大好きでした。先輩と車２台で出かけ、川の様子を見ながら（インスペクションと言います）下流のゴールとなる河原に１台、次に上流にスタートとなる河原に１台を停め、そこを起点に川を下りました。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」

川は常に水をたたえていますが、その水の表情は一定でも一様でもなく常に変化があります。長い川を下る途中には、ゆったりとした流れ、船底をすりそうな浅瀬（あさせ)、濃い緑に色が変わる瀞場（とろば)、轟音（ごうおん）鳴りやまぬ急流、岩と岩との間隙（かんげき）をすり抜けるスリル満点の激流などがあります。深い所は流れが遅く、浅くなればなるほど流れは速いです。岩と岩の間の流れは半端なく速いです。流れの速さは音の強弱にも比例します。水温や流れ方も水面近く、中層、水底で全然違います。それらの違いによって「２級ウォーター→１級ウォーター→トップウォーター（ホワイトウォーター)」と、ランクづけされる急流や激流を下り、難所をクリアしていくのが醍醐味でした。さて、そんな私のカヌー経験で、今でも鮮明に覚えている講習初日のエピソードを紹介します。

①　「自己責任において、自分の身は自分で守る、過信は禁物！！」

「自然が相手。川の形状、川底の状況、水量により流れも速さも違う。」

「カヌーをするときに絶対に川を侮ってはならない。水遊びかと軽く見てはいけない。」

「川を下った瞬間、初心者も上級者もなく判断は自分、命を守るのも自分だ。」

これはパドルさばきの練習を終え、カヌーに体をしずめ、「さあ、こぎ出すぞ！」と、はやる初心者に注意したインストラクターのことばでした。そして「命を守る練習」として行われたのが、なんと「溺れる体験」だったのです。私の初漕ぎは、カヌーの転覆（いわゆる「沈」＝チン)でしたが、危険回避の術（すべ）をまず学び、アウトドアの遊び方の原点を学び、自然への畏敬の念も感じ取ることができました。

②　「流れが急であればあるほど負けない速さでパドリングする。急流に負けない！」

カヌー操舵では流れの緩急に応じたパドルさばき（パドリング）が重要です。制動（ブレーキング)・推進・方向転換すべての動きがパドルさばきにかかっています。艇そのものは不安定で、実際に四万十川で渦巻く流れの中に入ってしまい身動きがとれずに、カヌーがくるくる回る木の葉のような状態になったこともありました。自然相手というのは予想がつかないこともあります。

講習会初日、砂と石まじりの河原（つまり、川ではなく岡っぺり）でインストラクターの指導の下、川を下る基本中の基本とパドリングの練習を何度もさせられました。こうして午前の基礎の練習メニューすべてを終え、午後初のリバー・ツーリングにいざ！このとき５～６㎞という初級～中級コースでしたが、川の様々な変化に直面したのを覚えています。急流・激流が迫ってくると恐怖感・緊張感・不安感…と『負』の感覚すべてが体中を駆け巡りました。しかし、そのときに転覆（「沈（チン)」を恐れない気持ちと、流れが速ければ速いほどその流れに負けないように無我夢中でパドルを漕ぐという午前中の基本練習のおかげで、艇の安定を保ち、水をつかみ、流れに乗り、難所もなんとか通過できたことを覚えています。午前の練習に無駄はなく、すべてはカヌー下りにつながっていました。何事も基礎基本が大事だということを学びました。

「人生は、『川の流れ』によく例えられます。」

人生においては、結果を求め何事も恐れず無我夢中・一心不乱にチャレンジしなければならない時期が必ずあります。みなさんにとっては本校（寄宿舎）で過ごす今が、人生という流れにおいては、きっと「急流・激流」にあたる時だと思います。ならば、負けないように強く漕ぐ力が必要です。そして漕ぎ出す先には目標や指標や到達点がいります。さらに長丁場を乗り越えるために、その土台となる基礎・基本のマスターが求められます。みなさんが本校（寄宿舎）でどう過ごすかは、結局は自分がどのように過ごしたいのか主体性にかかってきます。どんな川でも「急流・激流」を下って行くとやがては緩やかで穏やかな流れになり、その先には大海原が広がってきます。**「流れに負けなかった先にはきっと大きな世界・視野が広がっている」ことを信じ、「自分のことは自分で」を基本にパドリングに集中し、ぜひ、みなさん一人一人、自分自身に設定した目標達成（＝最上級の「トップウォーター越え)」をめざしてください。**以上式辞とします。